

コア シンクロニズム 3

コアシンクロニズム(Core Synchronism)という名称、全ての表記資料や図表は著作権によって保護されています。この資料をいかなる方法において複製または利用することを希望する人は誰でも、著者・ロバート・スティーブンスと翻訳者・新家江里香の書面による許可を得る必要があります。

いのちの流れ (life current) の動きと方向が
いのちの流動体 (life fluid)の動きと方向を決定する。
全ての構造は、この本質的な潮流の動きと
同調しなければならない。

チャクラが身体構造とともに触診されるとき、
チャクラはこのいのちの流動体と同調する。

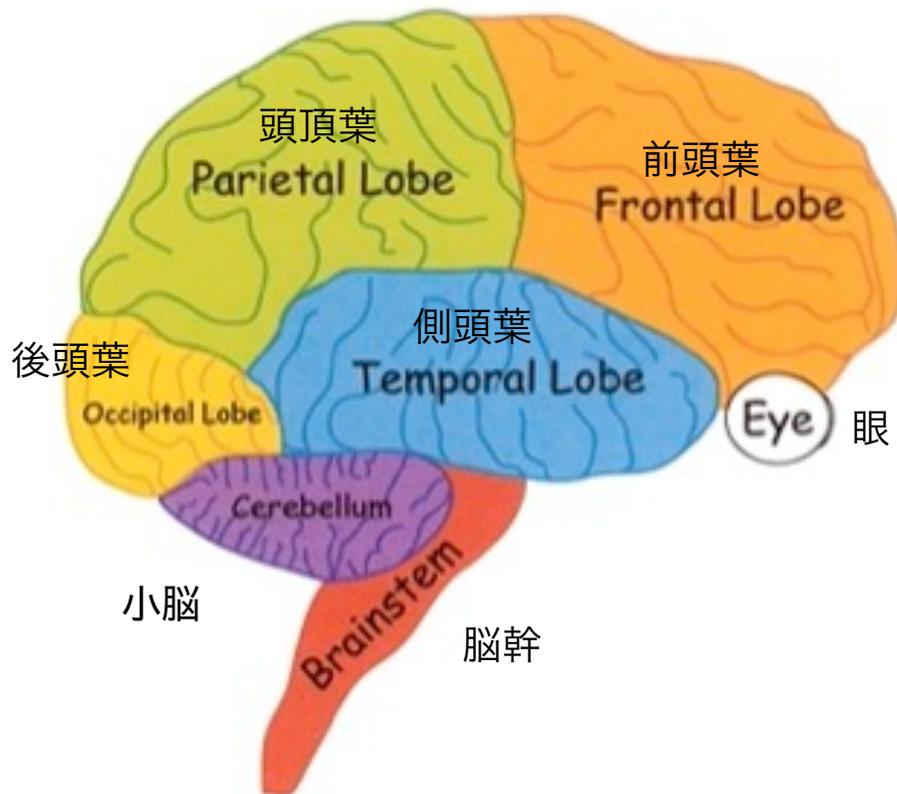
身体構造との関係性におけるチャクラの触診は、
一般的には回転としてではなく、↑↓の方向として
触診可能である。

縦列流 (long currents)は、いのちの流れといのちの流動体と
同調し、↑↓に動く。右側の流れは反時計回りに回転し、
左側の流れは時計回りに回転する。

環状流 (circular currents)は、いのちの流れの時計回りの回転に
したがう。

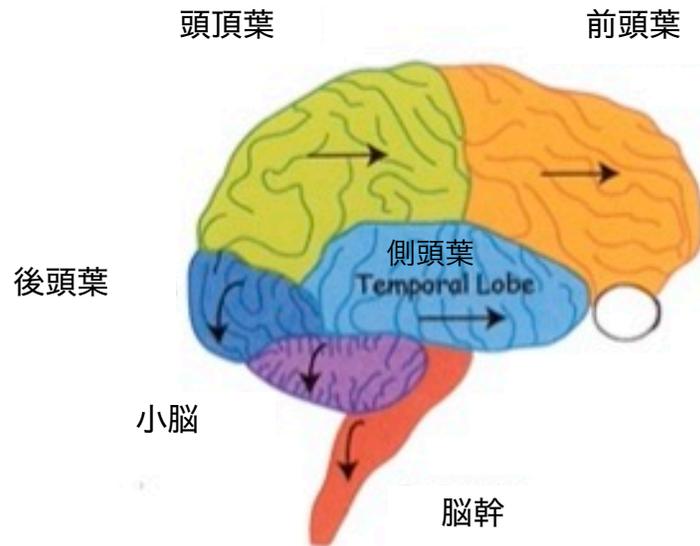
LOBES OF THE CORTEX

大脳皮質の葉

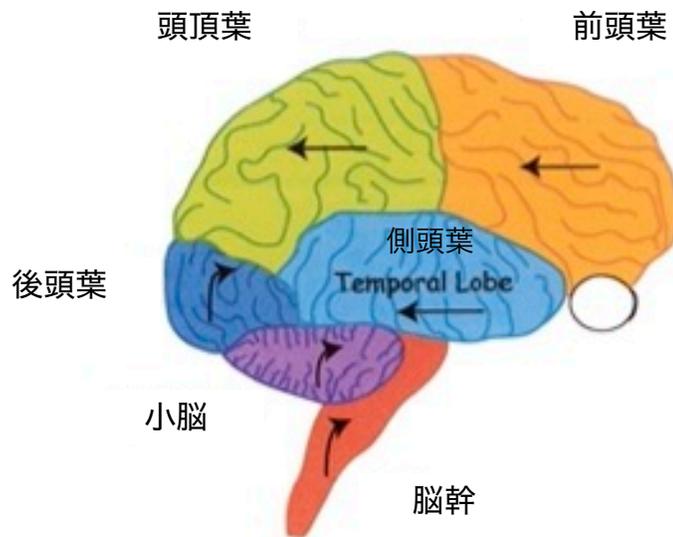


各々の脳半球の皮質は、葉と呼ばれる四つの領域に分けられる。
前頭葉は基本的に計画、決定、意図的な行動に携わる。
頭頂葉は脳において体を代表する。それは体から感覚的な情報を受け取る。**後頭葉**の一部は視覚に貢献し、しばしば視覚野と呼ばれる。**側頭葉**は聴覚、認識、記憶を含む幾つかの重要な機能を有するようである。

オープニング

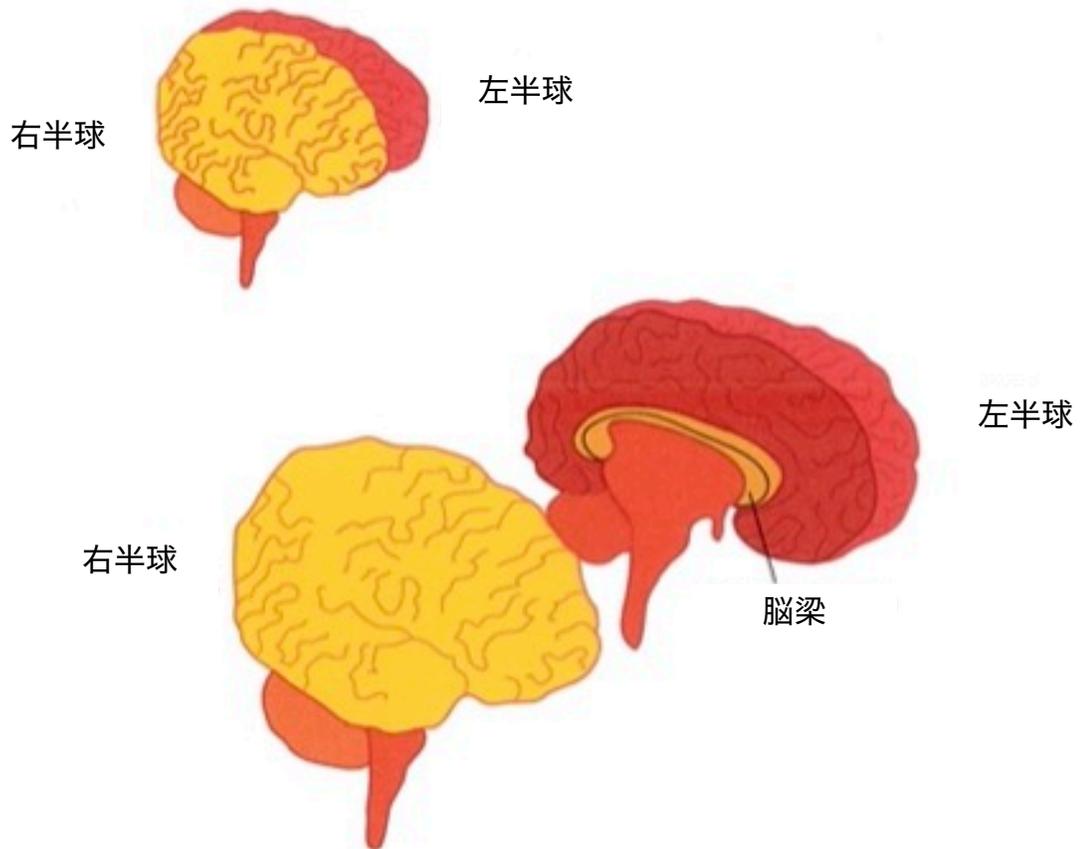


クロージング



CEREBRUM

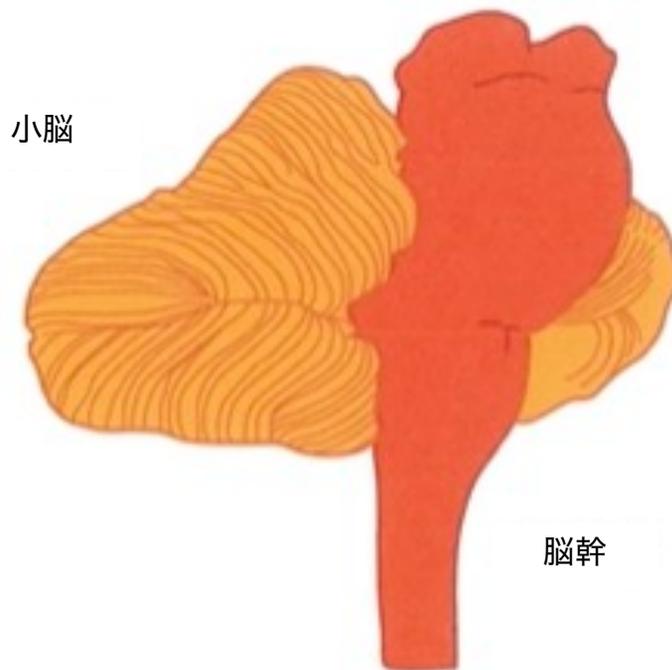
大脳



人間の脳の最大部は大脳(Cerebrum)である。それは二半分、または二半球に分けられ、それぞれは体の反対側を統括する。その半球は脳梁という約3億の神経繊維の束によって繋がれている。各半球の被いは、1/8インチ（約4ミリ）の複雑に織込まれた神経細胞の層で、皮質と呼ばれる。皮質はまず約2億年前の我々の祖先に現れ、我々を固有に人間とした。それゆえに我々は組織し、記憶し、意思伝達をし、理解し、創造することができるのである。

CEREBELLUM

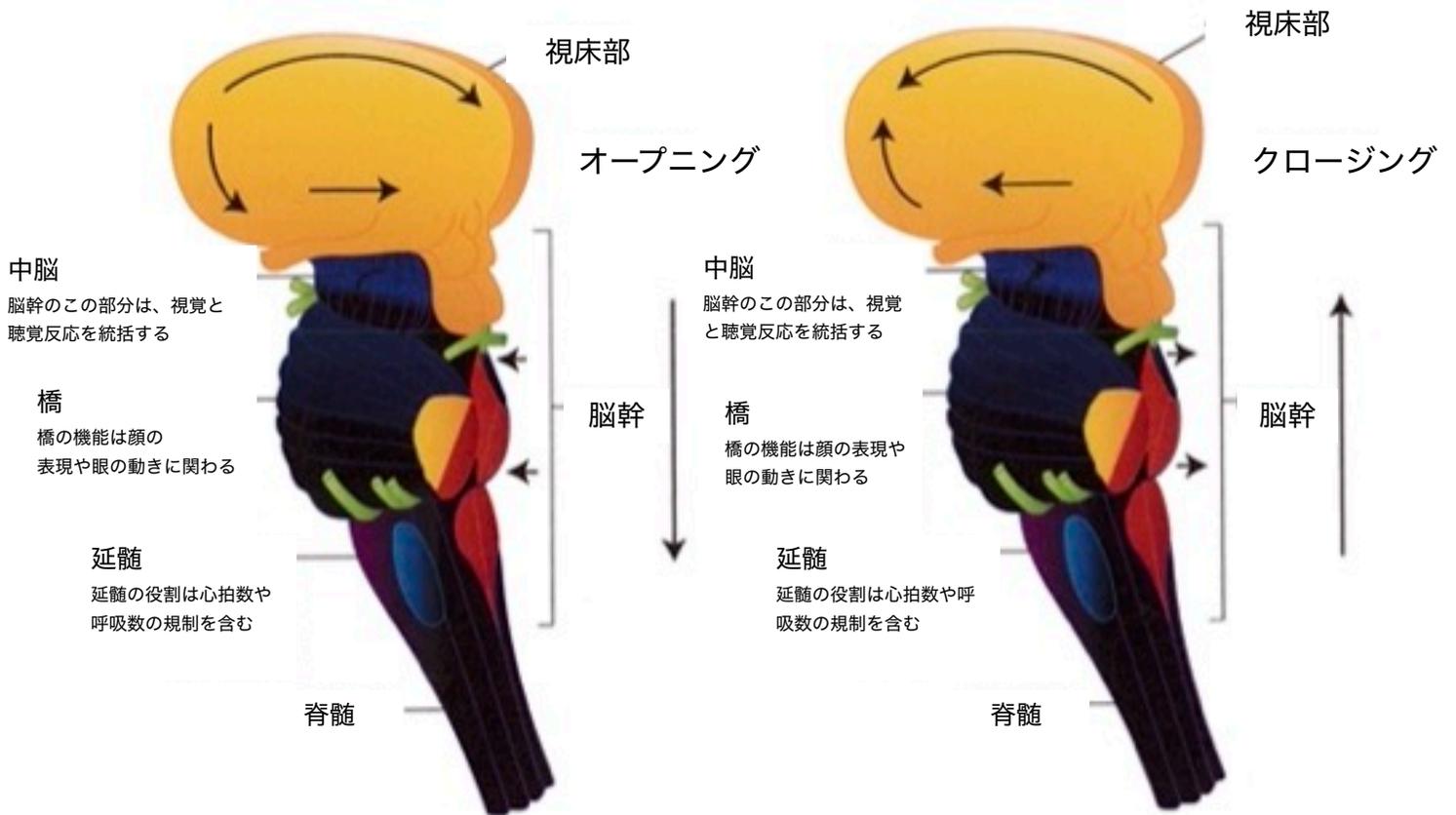
小脳



小脳、もしくは「小さな脳 (little brain)」は脳幹の後方についている。様々な機能の中でも、小脳は姿勢を調整・維持し、筋肉の動きを調和させる。人間の脳において小脳の大きさがこの100万年で3倍以上となったことに気づけば、これらの機能の重要性は明らかである。今では、単純な習得反応の記憶がそこに蓄積するかもしれないということらしい。

THE BRAINSTEM

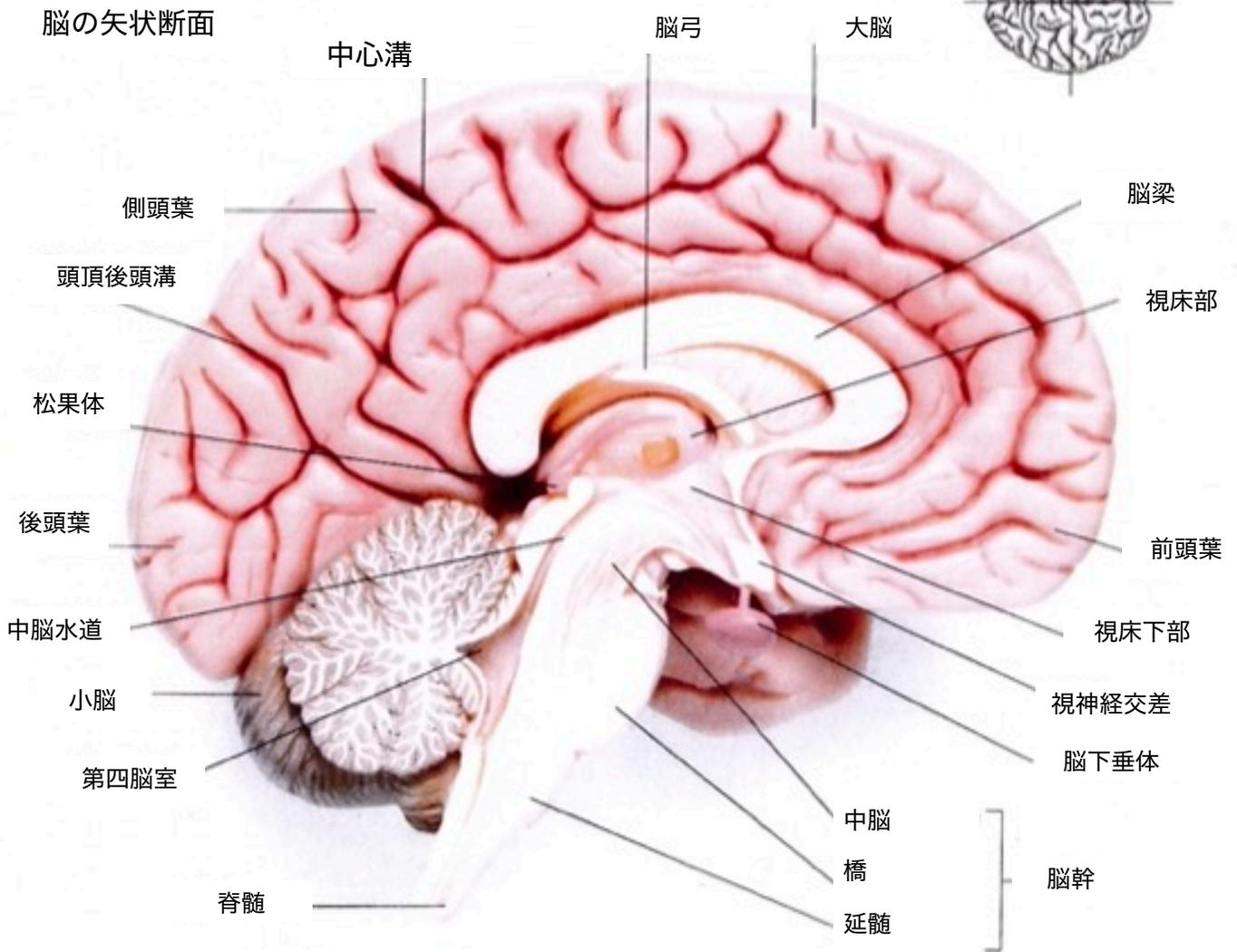
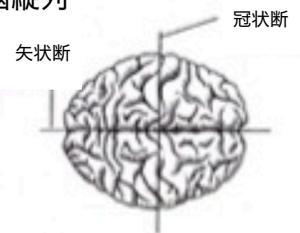
脳幹



脳幹は、脳の最も古い部分である。それは5億年以上前に進化した。それが爬虫類の脳全体に似ていることから、爬虫類脳としてよく言及される。それは警戒の一般的レベルの決定や、生命体に重要な情報を警告するとともに、生存に必要な基礎的身体機能——呼吸と心拍数を処理する。

脳は中枢神経系の主要器官であり、体の全ての随意・不随意活動の統括センターである。また脳は思考、記憶、感情、言語の複雑性の責任を担う。大人では、この複雑な器官は重さわずか1.4キログラム（3ポンド）、10,000,000,000

（百億）以上の神経細胞を含有する。3つの明らかな領域—脳幹、小脳、大脳は容易に見てとれる。脳幹は呼吸や消化などの主要な身体機能を統括する。小脳の主要な機能は姿勢の維持や身体運動の調整である。大脳は脳梁で繋がった左右脳半球からなり、最も意識的・知的活動の場である。



脳の手順

- 1) 蝶形骨頭蓋底の調整/コア
- 2) 頭頂/前頭 葉+骨+コア
- 3) 後頭/小脳/第一頸椎 葉+骨+コア
- 4) 側頭 葉+骨+後部脳床+コア
- 5) 脳床 (全体) 乳様突起+蝶形骨+コア
- 6) 前部脳床 蝶形骨+コア
- 7) 脳幹 +コア
- 8) 全頭蓋保持 コア+脳+骨

脳 パート 2

1) 大脳鎌/膜状骨/硬膜管

大脳鎌：前部=前方 後部=後方

膜状骨=側方/前方/下方

覚書：脊椎/脊髄神経=硬膜管と同じ動き

2) 脳梁

前部/後部=大脳鎌と同じ

3) 間脳（動きは大脳と同じ）

上部=前方（頭頂葉/前頭葉と同じ）

後部=後方（後頭葉と同じ）

側部=前方（側頭葉と同じ）

下部=下方（脳床と同じ）

4) 中脳/橋/延髄=下方/後方/側方

覚書：これらの部分が半分に分かれ前方/後方に動いていないかを確認すること

5) 脳弓/海馬/扁桃体

脳弓=前方/後方=（大脳鎌と同じ）

海馬=側方/前方/下方（膜状骨と同じ）

扁桃体=前方/下方/側方

覚書：脳弓が固まっている場合は脳室の一部も固まっているだろう/

脳室の前に脳弓を調整すること

6) 側脳室

前角=前方（前頭葉と同じ） 後角=後方（後頭葉と同じ）

下角=前方（側頭葉と同じ）

脳室の床=下方（脳床と同じ）

第三脳室=後方/下方/側方 第四脳室=後方/下方/側方

7) 松果体の動きを三脳室の動きと確認する

第三脳室=後方/下方/側方

松果体=後方/下方/側方

8) コア、縦列流、環状流、大脳、大脳鎌、膜状骨、頭蓋骨、
脳梁、小脳、脳弓、海馬、扁桃体、脳室、床、硬膜管、脊椎、脊髄神経

脳機能の改善の為の本質的關係：

大脳鎌/膜状骨と脳梁と脳弓

膜状骨と海馬

側頭骨と間脳の側面と側脳室

大きな脳の床と小さな脳の床と骨盤底

鋤骨と尾骶骨

脳神経と脳幹と縦列流 前部/後部

脳神経と全神経系

扁桃体と松果体：扁桃体は前方に、松果体は後方に動き、
両者はともに下方・側方に動く

海馬と扁桃体と側頭葉/間脳の側面/側脳室の下角

実践例 # 1

- 1) コアの回転の方向を点検する
- 2) 波動脈/コア・アシスト and/or ピース
- 3) 大小チャクラ 前部
- 4) 大チャクラ 後部
- 5) 大チャクラ 前部/後部 横隔膜 前部/後部
- 6) 要素脊椎部 (下部から上部/全体とコア/頭頂骨)
- 7) コア/骨盤底
- 8) 頭頂骨/後頭骨/C1/L5/仙骨/尾骶骨+コア (可能であれば)
- 9) 乳様突起/坐骨結節
- 10) 波動脈 (脈が感じられない場合は生誕体・三対関係などを続ける)
- 11) 脳の流れ
- 12) コア/篩骨

実践例 # 2

- 1) コアの回転を点検する
- 2) 波動脈/コア・アシスト and/or ピース
- 3) 大/小チャクラ 前部+
縦列流の方向を足、腹部、胸部、頭部で点検する
縦列流の方向を頭部でコアと点検する
- 4) 大チャクラ 後部
- 5) 大チャクラ 前部/後部 横隔膜 前部/後部
- 6) 要素脊椎部 (下部から上部/全体とコア/頭頂骨)
- 7) コア/骨盤底
- 8) 頭頂骨/後頭骨/C1/L5/仙骨尾/骶骨+コア (可能であれば)
- 9) 乳様突起/坐骨結節
- 10) 波動脈 (脈が感じられない場合は生誕体・三対体などレベル2の流れを続ける)
- 11) 脳の流れ
- 12) 目の小チャクラ/目/眼窩/コア
- 13) 篩骨/コア
- 14) 環状流 十字縫合 (ブレグマ) から
- 15) コア
 - a. カデューシス
 - b. 異常な不共時性の関係をスキャンする
 - c. パターン
 - d. 乳幼児、児童、成人のトラウマ、無意識の洞窟
 - e. 長波動/機能的静止点

実践例 # 3

- 1) コアの回転方向
- 2) カデューシス
- 3) 大/小チャクラ前部と縦列流
- 4) 環状流
- 5) 蝶形骨頭蓋底調整/コア
- 6) 脳の手順 全部
コア/縦列流/葉/脳床/頭蓋骨
- 7) コア スキャン 不共時性関係
- 8) パターン、幾何学形、トラウマ（乳幼児、児童、成人）
- 9) コア 長波動/機能的静止点に従う

覚書：長波動を誘発するには、コアの流れに添って、開閉両期で篩骨/コアを完全停止させる

コア レベル3：実践例 # 4

1. コアの回転流 十字縫合にて落ち着くまで回転性の流れに従う。
2. カデューシス 地のチャクラにてカデューシスを追い始める。
各チャクラを通じて、両方が流れていない場合には調整する。速度が増して上下端の区別がつかなくなるほど速くなるまで調整された流れの行き来を追う。
3. 波動脈 足趾骨で波動脈を見てどの要素が外れているのかを決定する。
4. 縦列流 縦列流を体の前部で点検・調整する。足元から始める。
手の配置：足元、膝以下の足、大腿部、骨盤、横隔膜、胸部、蝶形骨頭蓋底。可能であれば、器官、チャクラ、カデューシスをそれぞれの部分で縦列流と合わせる。
5. チャクラ 波動脈評定で外れていた要素のチャクラを点検する。
クライアントは側臥位で、そのチャクラを前後同時に点検する。
6. 脊椎区分 外れていた要素の脊椎区分をシンクロさせる。
空：C1-C7、風：T1-T9、火：T10-L5、水：仙骨、地：尾骶骨
その区分の一つ上、一つ下の脊椎も一緒に合わせる。なので、地を調整しているのであれば、仙骨、尾骶骨、骨盤底を調整する。空を調整しているのであれば、後頭骨からT1までを調整する。
7. 全脊椎と空の縦列流を同調させる 上方の火の指を後頭骨の基部へ、手は頸椎へ、下方の手と肘は残りの脊椎、仙骨まで接触させる。
8. 横隔膜、コア、カデューシス、チャクラ、器官 クライアントは側臥位で、外れていた要素のものを合わせる。
9. 波動脈の再点検 その要素がまだ外れている場合には、生誕体を調整する。
10. 脳の手順
11. 施術の終わりに機能的静止点に至るまで、カデューシス、コアに従う。

コア レベル3：実践例 # 5

- 1) コア・カレントの方向
- 2) 波動脈評定
- 3) カデューシス
- 4) 波動脈評定
- 5) 波動脈がまだシンク口から外れている（アウト）場合：
クライアントは側臥位で、その要素のカデューシス/大小チャクラ/
縦列流/横隔膜/器官などを点検(前部/後部を一緒に)。
- 6) 波動脈評定
- 7) 波動脈がまだ外れている（アウト）場合：
脊椎部 その要素の脊椎の部分をシンク口させる
空：C1-C7、風：T1-T9、火：T10-L5、水：仙骨、地：尾骶骨
その区分の一つ上、一つ下の脊椎も一緒に合わせる。なので、地を調整しているのであれば、仙骨、尾骶骨、骨盤底を調整する。空を調整しているのであれば、後頭骨からT1までを調整する。
全脊椎と空の縦列流を同調させる 上方の火の指を後頭骨の基部へ、手は頸椎へ、下方の手と肘は残りの脊椎、仙骨まで接触させる。
- 8) 波動脈評定
- 9) 波動脈がまだアウトの場合：その要素の生誕体を調整→波動脈評定→まだアウト：三対関係の調整→波動脈評定→まだアウトの場合：その要素の歯を大小チャクラと合わせる→波動脈評定→まだアウト：GO NUTS!
- 10) コア/頭頂骨/後頭骨/C1/L5/仙骨/尾骶骨/骨盤底
- 11) 脳の流れ 全体：
コア/縦列流/葉/脳床/頭蓋骨
- 12) 顔骨と脳
- 13) コア・スキャン 不共時性の関係
- 14) パターン、幾何学形、トラウマ（乳幼児、児童、成人）、無意識洞窟
- 15) コア 長波動/機能的静止点に従う

コアシンクロニズム レベル3 実践例 #6

- 1) ニュートラル・オイルを額につけて、優しく揉みこむ
- 2) 立法骨調整
- 3) コアの評定、矯正し、その動きを追う
- 4) 足の小チャクラをチェック。振幅が大きくなり、指をチャクラから跳ね返すまで保持する。
- 5) 踵骨と足の小チャクラをシンクロさせる
- 6) 足の縦列流を評定・矯正する。感じることでできる全ての動き、それらを体の最頂部までを追う。ラムダから出入りする立法（3D）的存在として追う。
- 7) クライアントは側臥位。C1-後頭骨とL5-仙骨・尾骶骨。コア、縦列流、骨盤底を加える。
- 8) 手首、前腕を使い、C1から尾骶骨までシンクロさせる。縦列流を加える。全脊椎は後方、縦列流は下方に動く。これは脊椎を減圧し椎間板を回復させる。
- 9) 腎臓と副腎を評定・調整する。これらは交感神経やストレスで弱められている。副腎を健康に保つには休養が必要である。縦列流を加える。
- 10) クライアントは仰向けに。手首をラムダ付近で合わせた手の配置で縦列流を加えて蝶形骨頭蓋底接合部をみる。大脳鎌に深い注意を払う。コアを加える。
- 11) 頭頂葉-前頭葉、骨と縦列流、大脳鎌、コアを加える。
- 12) 後頭葉、骨と膜状骨。縦列流とコアを加える。
- 13) 側頭葉、骨、縦列流、コア、膜状骨。
- 14) 親指を蝶形骨、火の指を乳様突起に置いて脳床をみる。
- 15) 水の指を乳様突起に、風の指を蝶形骨に、親指を十字縫合に。脳床にコアと縦列流を加える。膜状骨と隣接する骨と構造を加える。側頭葉に深く注意を払う。側頭葉は他の多くの部分を安定させる際に問題を引き起こす。可能な時にはいつでも側頭葉を視野に入れること。
- 16) 蝶形骨のみに集中する。脳床の前部を点検し、シンクロさせる。コア、脳、頭蓋骨と顔面の骨、縦列流、大脳鎌、膜状骨を追う。篩骨は何をしているのか、目、鋤骨はどのようなかを自身に問いかける。
- 17) 十字縫合へ。全てを追う。脳幹は全体として、上方・下方の動きを追う。
- 18) 脳幹を部分部分で見る。脳室を加える。これらは、本当に動かなくなっていることがあるので、しっかりと時間を当てること。
- 19) 脳幹を大脳に加え、シンクロさせる。機能的静止点を追う。

「私たちがよりリラックスすれば、私たちの無意識をよりよく解放させることができる。これは純粋な感情として出現する。」

コアシンクロニズム レベル3 実践例 # 7

- 1) ニュートラル・オイルを額に塗布し、優しく揉み込む
- 2) コアが遅くなるまで追う。
- 3) 足元で小チャクラを点検し、振幅が大きくなるまで保持する。
- 4) 立法骨調整
- 5) 足の小チャクラを踵骨とシンクロさせる。
- 6) 縦列流を足元と頭部でそれらが同時であると感じるまで追う。
コアを加える。
- 7) コア、C1、後頭骨をL5、仙骨、尾骶骨、骨盤底を合わせる。
- 8) 腎臓-副腎をシンクロさせる。胸椎9番と10番を加える。
クライアントの腕を体の側面に置くことによってこれを見出す。
肩甲骨の先端部から脊椎をたどる。これが頸椎7番である。
9番目と10番目まで下がる。
- 9) 全脊椎
- 10) 乳様突起を骨盤底に注意を払いながら坐骨結節と合わせる。
これらは逆方向へ動くはずである。
- 11) クライアントは仰向けの状態で、カデューシスを骨盤底まで追う。それがとても早くなり、頭部と骨盤底に同時にあるように感じるまで追い、調整を助ける。
- 12) 十字縫合において環状流を追う。右側、もしくは十字縫合から調整する。
- 13) 脳幹のために小さな脳の調整の手順を行う。
- 14) 大脳を加え、機能的静止点を追う。

コアシンクロニズム レベル3 実践例 # 8

- 1) コアの回転を点検する（速さ、対称性、方向）
- 2) 中方/側方の波動脈評定
- 3) カデューシスを観察する：尾骶骨から始め、各中核への上下を追って尾骶骨に戻る。尾骶骨、第3の目で保持する等。もしもこれで経路が開通しなければ、詰まっているところ、例えば火の中核や風の中核などで止める。いったん経路が確立されれば、対称的に交差するまで詳細に追う。それは金色の光となって追うことができなくなるほどまでに速度が速くなり、第三の目と地の間をバウンドする。それは看取できる動きのない金色の光のカデューシスの像として現れるだろう。
- 4) 金色のカデューシスはすぐに神経系へと導く。神経系の整合性/対称性のシフトに注視する。傷んだところは金色の光で満たされるようになる。忍耐強く注意力を保つこと。やがて、あなたは中核に戻ってコアを見るようになる。それは各々の脊椎部において停止して支脈へと光を放つだろう。そして、それは停止することがなくなるが、ちょっとした躊躇感を持っているだろう。これら全てがなくなるまでそれを追うこと。
- 5) 足元で波動脈を再点検
- 6) 足元の小チャクラを点検。足元の小チャクラを踵とシンクロさせる。
- 7) 手の指を足の指において、足趾/手指からラムダまでの縦列流の行き来の動きを観察する。前部と後部の動きの両者を見る。
- 8) 足元から十字縫合までの環状流を見る。環状流は、頭頂からはクライアントの右側へと動くはずである。体の周り全体の動きを追う。
- 9) コア、縦列流、環状流を一緒に観察する。可能であればカデューシスを加える。それぞれのタイミングは合うべきであり、オープン期において縦列流が手指/足趾の先にある時、コアは足元に、環状流は足元に、カデューシスは尾骶骨にあるべきである。
- 10) 小さな脳を大脳、頭蓋骨と静かになるまで合わせる。各部分で行う。小さな脳の前部からはじめ、頭頂葉/前頭葉とシンクロさせ、小さな脳の後部を後頭葉/小脳とシンクロさせる等。脳梁を大脳鎌と膜状骨、松果体、脳室などと加えるのを忘れずに。コアと骨を加える。小さな脳の床、大脳の床、小さな脳の側部と側頭葉に深く注意を払い、コア、縦列流、環状流、カデューシスを脳全部に加える。
- 11) コア・スキャン 不共時性の関係、パターン、幾何形態、トラウマ（乳幼児、児童、成人）と無意識の洞窟
- 12) ニュートラル・フォーミュラを第三の目のチャクラと前頭骨に塗布し、機能的静止点までコアを追う。

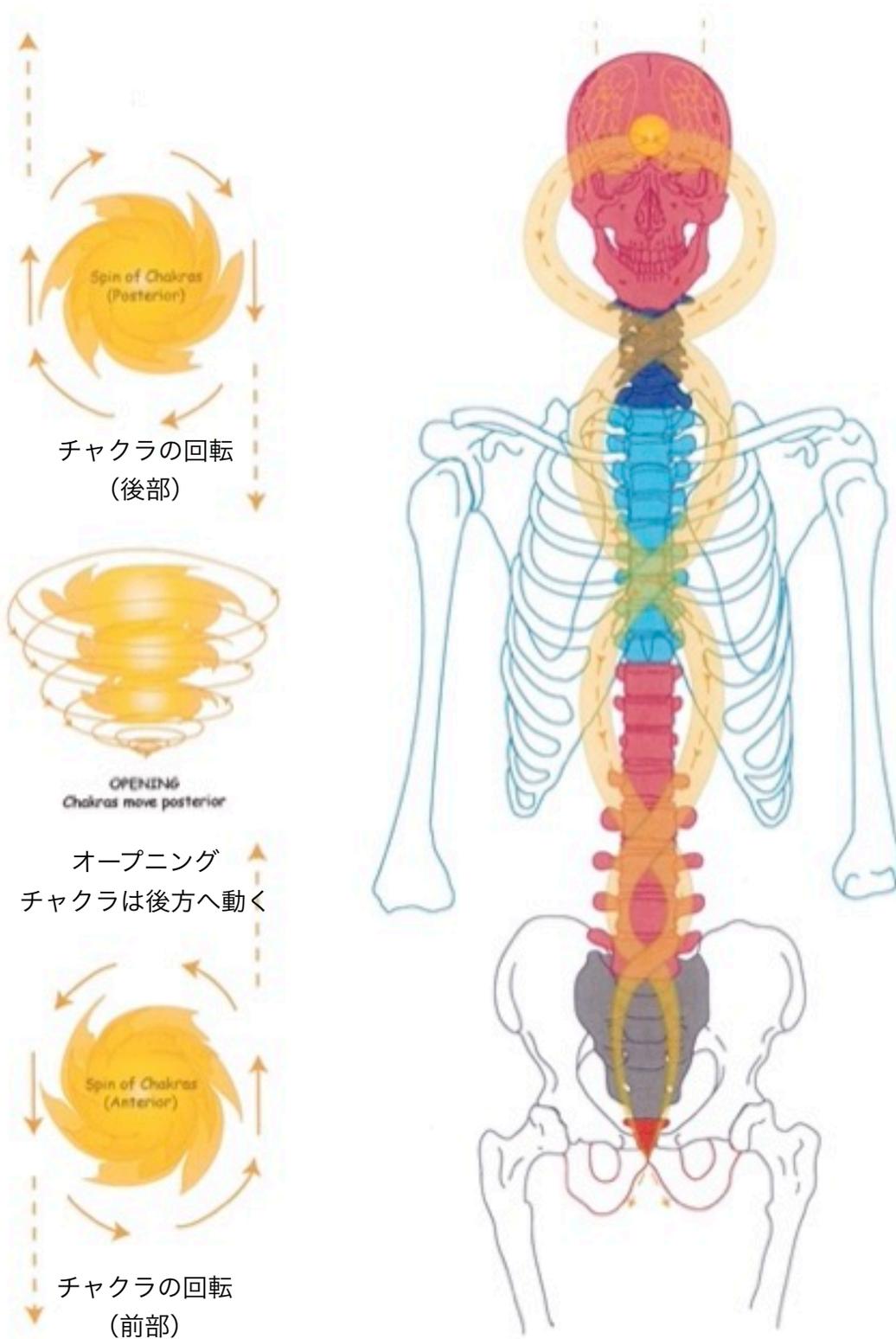
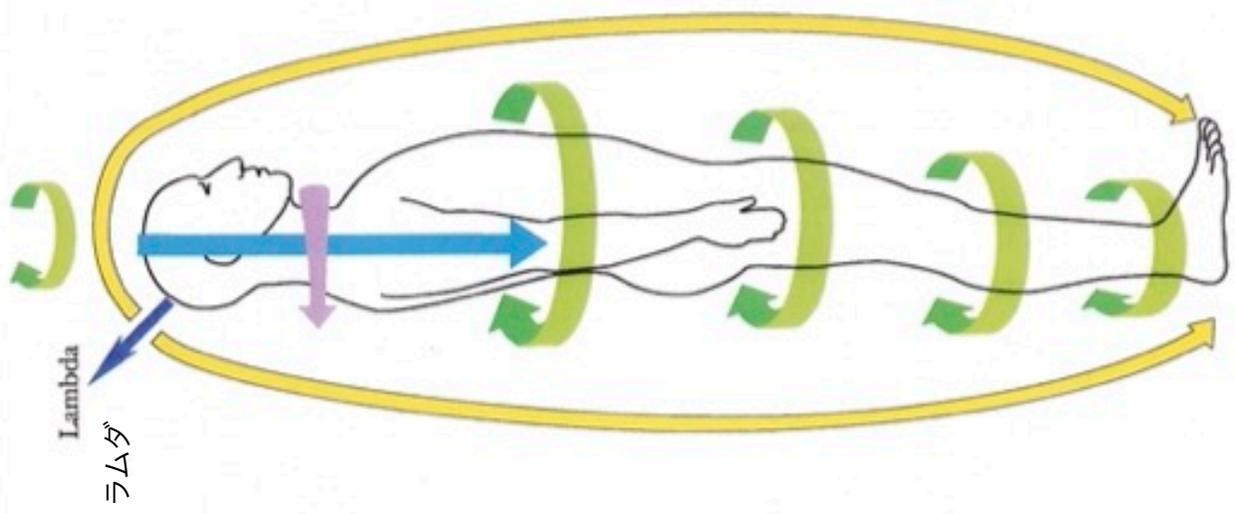
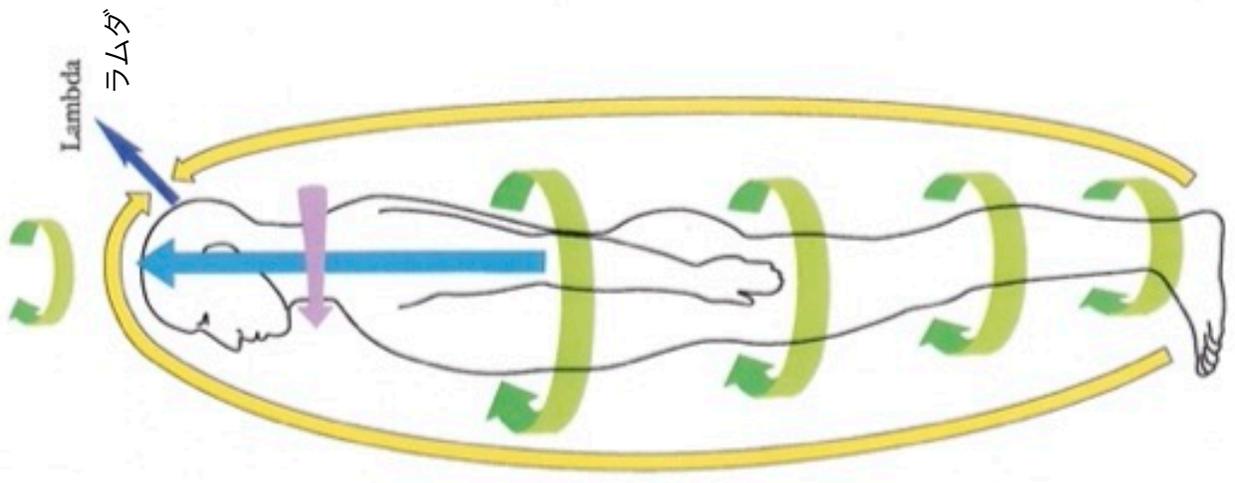


Illustration by Ashlee LaVine
 Copyright 2002 Robert Stevens



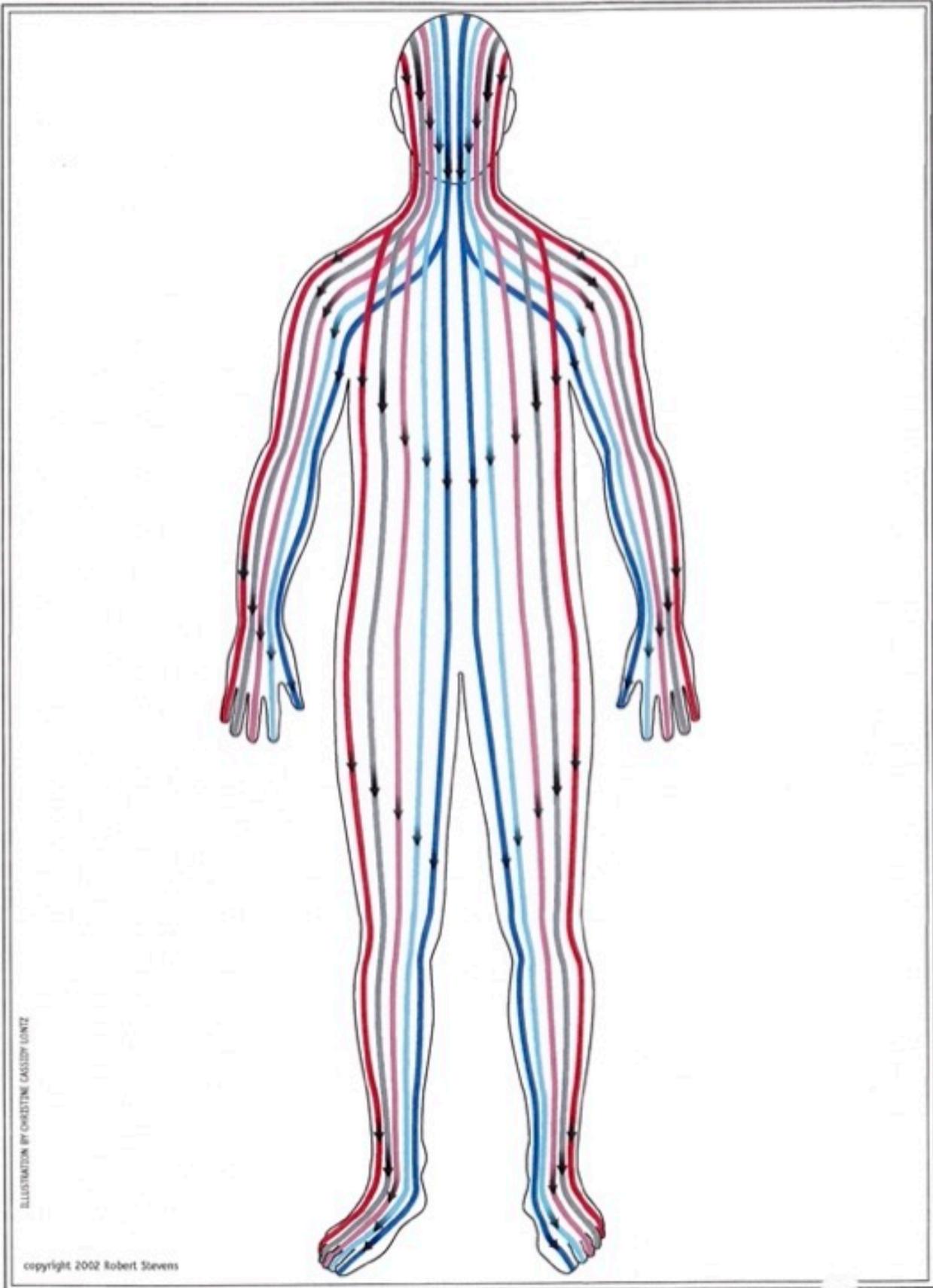


ILLUSTRATION BY CHRISTINE CASSIDY LONTZ

copyright 2002 Robert Stevens

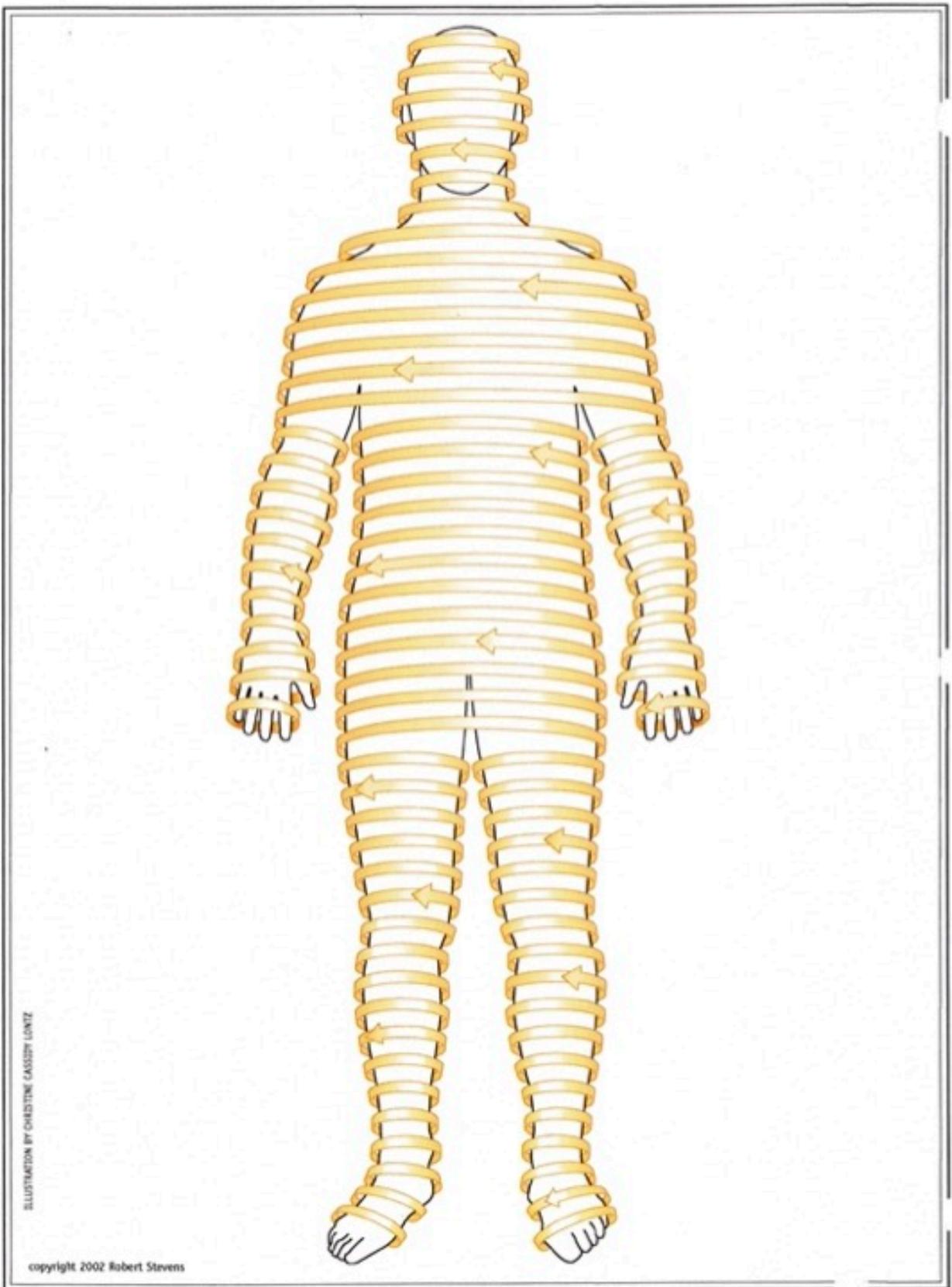
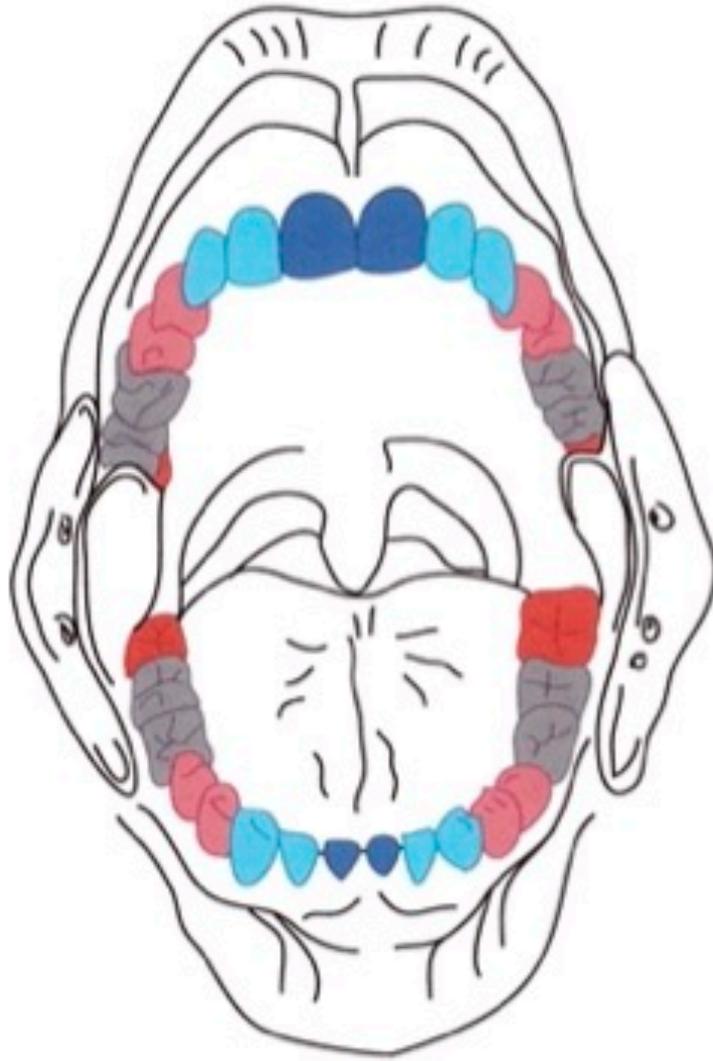


ILLUSTRATION BY CHRISTINE CAUSSEY LOWITZ

copyright 2002 Robert Stevens

歯への要素の関係



■ 空 ■ 風 ■ 火 ■ 水 ■ 地

コアシンクロニズム 3

全ての神経系の機能は脳内の脳脊髄液によって影響される。

...全ての神経は脳の分泌液を吸収する... Dr. A.T. スティル

Dr.サザーランドは何が脳脊髄液を動かすのかを厳密に述べていない。彼は、それがエネルギー的に動かされていると説明しなかった。彼は、彼の同僚によってそれが受け入れられると感じなかったからである。

オープン期 (Open Cycle)

脳脊髄液 産生期

コア 下方

体の部位 側方/下方に開く

クローズ期 (Close Cycle)

脳脊髄液 吸収期

コア 上方

体の部位 中方/上方に閉じる

コアとの関係性を確立しなければ、維持されない。

チャクラ —

チャクラは、時計回り、もしくは反時計回りの方向に回転する。体の構造にシンクロさせているとき、回転を見失うだろう。それは後方/前方の方向における流動体のような質の動きを表す。

全チャクラ

後方/前方

全てのチャクラは以下を除いて後方/前方に動く：

| | |
|----------|-------|
| 脾臓 | 側方/中方 |
| 肝臓/胆嚢 | 側方/中方 |
| 迷走神経チャクラ | 側方/中方 |
| 顎関節チャクラ | 側方/中方 |
| 足元 | 下方/上方 |
| 睾丸 | 下方/上方 |

縦列流

| | |
|---------|----------|
| 縦列流 | 下方/上方に動く |
| 左の縦列流の中 | 時計回り |
| 右の縦列流の中 | 反時計回り |

不共時性の脳の部位

脳は立体構造であるため、底 (床：floor)を有する。

蝶形骨—シンク口から外れている時、シンク口から外れた脳床に追従する
 側頭骨—シンク口から外れた側頭葉に追従する
 頭頂葉と前頭葉がシンク口から外れている際は脳全体の調整の流れを行う。

脳の調整の流れ

1) コアを点検する

2) 蝶形骨頭蓋底の調整+コア

常にこのステップをいかなる頭部の調整の前に行う。頭蓋骨が整っていないければその中身は、その誤配列のものにのみ反応するだろう。手の配置：片手は後頭骨の下に、火の指は頸椎1番に、他方の手は前頭骨に、意図は蝶形骨に。

| | | |
|-------|---------|-----------|
| | 後頭骨/C1 | 後方、下方/後方 |
| オープン期 | 前頭骨/蝶形骨 | 前方に弧を描く動き |
| | コア | 下方 |

開閉期で完全停止を行う。それぞれの完全停止の間、体は必要な調整を行う。いかなる調整にも気づかなくなるまで完全停止を行い続ける。これは全てを中心の配列、もしくは中立性の均衡へと浮き戻す助けとなる。

3) 頭頂葉/前頭葉+骨+コア

手の配置：両手を前頭骨・頭頂骨の上にかぶせる。対となった葉は互いに共時性から外れていたり、片方の葉がそれ自体で外れていたりするので、注意する。

| | |
|-----|-------|
| 頭頂葉 | 前方/後方 |
| 前頭葉 | 前方/後方 |

コアを加える。そして頭頂骨と前頭骨を加える。開閉期において完全停止をおこない、調整をみる。両方向においていかなる調整も感じなくなり、リズムがスムーズになるまで完全停止を行う。

| | |
|-----|------------------|
| コア | 下方/上方 |
| 頭頂骨 | 側方/中方 |
| 前頭骨 | 前方/後方（わずかな円弧の動き） |

4) 後頭葉と小脳/C1+骨+コア

手の配置：両手は後頭骨の下に、水の指は頸椎1番を触診している。

| | | |
|-------|------|-------|
| | 後頭葉 | 後方/下方 |
| オープン期 | 小脳 | 後方/下方 |
| | 第一頸椎 | 後方/下方 |

コアを加える。それから後頭骨を加える。コアと骨を加える際には、手の位置を修正する：片手は後頭骨の下に、もう片方の手はコアに。開・閉期で完全停止を行い、調整されているのを見る。調整が感じられなくなり、リズムがスムーズに感じられるようになるまで、両方向に置いて停止を続ける。

| | |
|-----|-------------|
| コア | 下方/上方 |
| 後頭骨 | 後方・下方/前方・上方 |

5) 側頭葉+骨+脳床後部+コア

手の配置：火の指は乳様突起に、手の平の角は側頭骨の耳の上部に。常に側頭骨がそれ自体でシンクロしているかをまず確認すること。

| | |
|---------|---------------------|
| 乳様突起 | それらの距離は減じる/増す |
| 側頭骨の大体部 | 側方・わずかに前方/中方・わずかに後方 |
| 側頭葉 | 前方/後方 |

乳様突起を脳床が何をしているのかを見る観察台として用いる。それからコアを加える。手の配置を変える必要がある：水の指は乳様突起に、火の指は耳の上側に、親指は十字縫合に。調整が感じられなくなるまで、開・閉期で完全停止を行う。

| | |
|------|-------|
| 脳床後部 | 下方/上方 |
| コア | 下方/上方 |

6) 脳床（全体）+乳様突起+蝶形骨+コア

手の配置：火の指は乳様突起、親指は蝶形骨に。乳様突起/蝶形骨から全脳床を見ることができる。調整が感じられなくなるまで、開・閉期で完全停止を行う。

| | |
|---------|---------------------|
| 乳様突起 | それらの距離は減じる/増す |
| 側頭骨の大体部 | 側方・わずかに前方/中方・わずかに後方 |
| 全脳床 | 下方/上方 |
| 蝶形骨 | 前傾/後傾 |
| コア | 下方/上方 |

コアをチェックするために手の配置を変える：親指は十字縫合に、風の指は蝶形骨に、火の指は顎関節に、水の指は乳様突起に。調整が感じられなくなるまで、開・閉期で完全停止を行う。

7) 脳床前部＋蝶形骨＋コア

手の配置：親指は十字縫合に、風の指は蝶形骨に。蝶形骨を追い、脳床前部の観察台として利用する。そしてコアを加える。調整が感じられなくなるまで、開・閉期で完全停止を行う。

| | |
|------|-------|
| 脳床前部 | 下方/上方 |
| 蝶形骨 | 前傾/後傾 |
| コア | 下方/上方 |

8) 脳幹＋コア

手の配置：親指を十字縫合に。意図はコア、脳幹を追う。それは一つのまとまりとして動くべきであるが、各々の側が別れて別々に動いているように感じることもある。別れた半分同士をシンクロさせる。いかなる異常な動きをも停止させる。すると脳幹は正中線、均衡点として浮かぶ。調整が感じられなくなるまで、開・閉期で完全停止を行う。コアとのシンクロがより近くなればなるほど、それが分離されているとより感じられなくなり、それを通して動いているように感じられるだろう。

| | |
|----|-------|
| コア | 下方/上方 |
| 脳幹 | 下方/上方 |

9) 全頭蓋保持＋コア＋脳＋骨

そして全部を一緒にする。手の配置：地の指は第一頸椎と後頭骨のあたりに、水の指は乳様突起に、火の指は側頭葉と側頭骨を感じるために顎関節に、風の指は蝶形骨、前頭骨、前頭葉に、親指は頭頂骨に置き、意図はコアと脳幹に（再度側頭葉・骨がどうしているかを点検する。葉が外れていると、骨も安定することはできない）。もしも動きに少しでも詰まりを感じるならば、脳床を骨盤底にシンクロさせる。これはクライアントのトラウマの記憶を解放する助けとなる。

| | |
|--------|-------|
| コア | 下方/上方 |
| 頭頂/前頭葉 | 前方/後方 |
| 頭頂骨 | 側方/中方 |
| 前頭骨 | 前方/後方 |

| | |
|--------|---------------------|
| 蝶形骨 | 前傾/後傾 |
| 後頭葉/小脳 | 後方・下方/前方・上方 |
| 後頭骨 | 後方・下方/前方・上方 |
| 第一頸椎 | 後方/前方 |
| 脳床 | 下方/上方 |
| 乳様突起 | それらの距離は減じる/増す |
| 側頭骨大体部 | 側方・わずかに前方/中方・わずかに後方 |
| 脳幹 | 下方/上方 |

10) 篩骨+コア

クライアントの篩骨部にインサイト・フォーミュラを一滴加える。手の配置：片方の手はコアに、もう片方の風の指を篩骨に。篩骨をコアにシンク口させる。調整が感じられなくなるまで、開・閉期で完全停止を行う。これはサイクルをゆっくりにし、より深いリラクゼーションと癒しのための機能的静止点にアクセスすることが可能となるはずである。

| | |
|----|-------|
| 篩骨 | 後方/前方 |
| コア | 下方/上方 |

縦列流

縦列流をエーテル体の神経系として考える。それらは低いうなりを持った回路、体の電流である。それらは、頭部の後部泉門、ラムダと手足の指先で合流する。

身体（骨や器官）におけるすべてのものは、縦列流の動きにしたがう。それゆえ、もしも身体構造が縦列流とあっていないならば、それらは安定することができない。それらは調整にとっても反応しやすく、ほぼそれ自体で調整される。身体構造とシンク口しているときは、それらは脳脊髄液の動きと同じ速度で動くはずである。

以下のものに縦列流をシンク口させる：

| | |
|------|-----------|
| 身体構造 | (足先から頭まで) |
|------|-----------|

| | | |
|-------|-----------|--------------|
| 身体構造が | オープン/クローズ | の時 |
| コア | | 下方/上方 |
| 縦列流 | | 下方/上方 |
| チャクラ | | 後方/前方 |
| 環状流 | | 体の外部を時計回りに回る |

環状流

コアが下方に体の中央を下がっていくと同時に、体の外部の周りに、時計回りの方向の螺旋がある。この螺旋を環状流と呼ぶ。体におけるすべての円形の構造は、環状流によって維持される。環状流が逆回りだと、免疫システムが弱まる。

手の配置：親指は十字縫合に。意図で環状流を追う。不共時性にある部分が見つければ、クライアントの右側に座す。左手をコアに、右手を環状流に。正常であるのは、その流れがあなたに向かっている時が、時計回りの方向である。点検するにつれて、右手は体の下部へ向けて動かしてゆく。もしも逆方向の動きがあれば、意図で止めると矯正され、正しい方向へ動くはずである。外れているものをシンクロさせるまで、それ以上先に進んだり、みたりすることはできないだろう。体の前部と後部でシンクロから外れていることがあるので、体の周りも同様に、3次元で環状流を追うこと。

| | |
|-----|-------------------|
| コア | 螺旋は背骨の中心を時計周りに降りる |
| 環状流 | 螺旋は体の外の周りを時計回りに回る |

カデューシス

カデューシスは、エーテル体の「コア」とみなされる。

手の配置：親指は十字縫合に。意図で、その人にカデューシスが何をしているかを見せるよう頼む。あなたは、地のチャクラから第三の目のチャクラまでの完全なる十文字の動きを見ることができはるはずである。あなたが追うことができるように、速度を落とすように頼む必要があるかもしれない。

それは閉じられた環状のシステムであるので、開始・終着点というようりも継続した流れを見るであろう。この動きが正される必要があり、でなければ、他のものがつながることができない。

| | |
|--------|-------|
| コア | 下方/上方 |
| カデューシス | 下方/上方 |

もしもカデューシスの一部または複数部が失われているならば、それを地のチャクラまでおって、完全停止を行う。それは正しく回復されるはずである。もしもどちらかの極（端）が見えなければ、最上部または最下部において保持する。開閉期において完全停止を行うことは、それを再度シンクロさせる助けとなる。一度一緒にシンクロすれば、両端を見ることができるようだろう。それはあまりに速く動くので、追うことができなかつたり、どちらの端にあるかが分からなくなるだろう。その時点で、カデューシスへの調整は終わりである。

コアをそのチャンネル（経路）にシンクロさせる

手の配置：親指は十字縫合に。コアはそれが走る経路とシンクロしていないことがあり得る。これはとても深い不共時性の関係性である。これはあなたが、そのクライアントに相当数の量のコアシンクロニズムの調整を行うまであらわれることはない。そのような場合には、あなたがすべてのものをシンクロさせた時に抵抗を感じ、コアが動いている時に、まだ何かがおかしいと感じられるだろう。チャンネルは、コアがその中で動く導管である。それは体の中心にある髪の毛の内側にある螺旋のようなものである。

| | |
|-------|-------|
| コア | 下方/上方 |
| チャンネル | 下方/上方 |

コアを意図でスキャンするために利用する

意図で、不共時の両極の関係性を見つける

手の配置：親指は十字縫合に。生命力の叡智に、シンクロから外れている対となった構造物を示すように頼む。十字縫合から、コアはその間を行き来し、シンクロから外れた対になった構造物間との伝導線を示すだろう。

その体の部分を互いにシンクロさせる。これらのペアをシンクロさせるとき、このいわゆるちょっとした調整がなされることが重要であるかは分からない。それから、他のシンクロさせるペアが示されるだろう。コアが何か他のものを示すようになるまで、対になった構造物をシンクロさせ続けること。もしもその関係性をシンクロし損ねたら、コアに戻りなさい。そうすればまた同じ関係性が示されるだろう。

脳のパターン

脳のパターンとは、過去におけるある経験の記録である。あなたが停止させたとき、エネルギーがその溝（わだち）に流れ込み、それは消散する。これらのパターンは、ストレスの不必要なパターンであり、そこにあるべきではない。それは、クライアントがそのパターンを走らせるために、多くのエネルギーを消耗する。それは何度も何度も運行される。その動きを止めなさい、そうすればそれはすぐに消失する。それらを解放するにつれ、クライアントはより深くリラックスした状態となる。

幾何形態、パターン、など

手の配置：親指は十字縫合に。意図で、そこにあるべきでない異常なパターンを探す。何か異常なものが見られれば、そのパターンを追い、意図で止める。

脳の虫（もがく線）

それらを意識における溝、わだち、もしくは消失と考える。それは思考（怒りのような感情）の習慣的パターンである。その溝は存在し、それは、あなたをその溝に陥れるストレスの契機でしかない。それを追い、意図で止めると、それは消失する。その溝は何層にもなっていることがあり得るので、より深いレベルにおいて似たような溝を見ることができるということを覚えておく。

過去のトラウマ（乳幼児、児童、成人）

コアを追っている際に、突然、あなたは赤子の頭か小さな子どもの頭を持っているように感じることもある。あなたはこの赤子/子どもの体を見れることもあれば、そうでないこともある。動転しないように。あなたはただ、過去のトラウマにアクセスしているだけなのである。成長した生命体はこのトラウマを包み、その周りに成長したのである。

時にそれは正されるべき不共時の関係性を示すこともある。時には、あなたはただ見ているものを観察する必要があるだけの時もある。それらは可動性のあるものとなり、コアとシンクロして消散する。あなたはいかなる年齢層においてもこれを見るかもしれない。

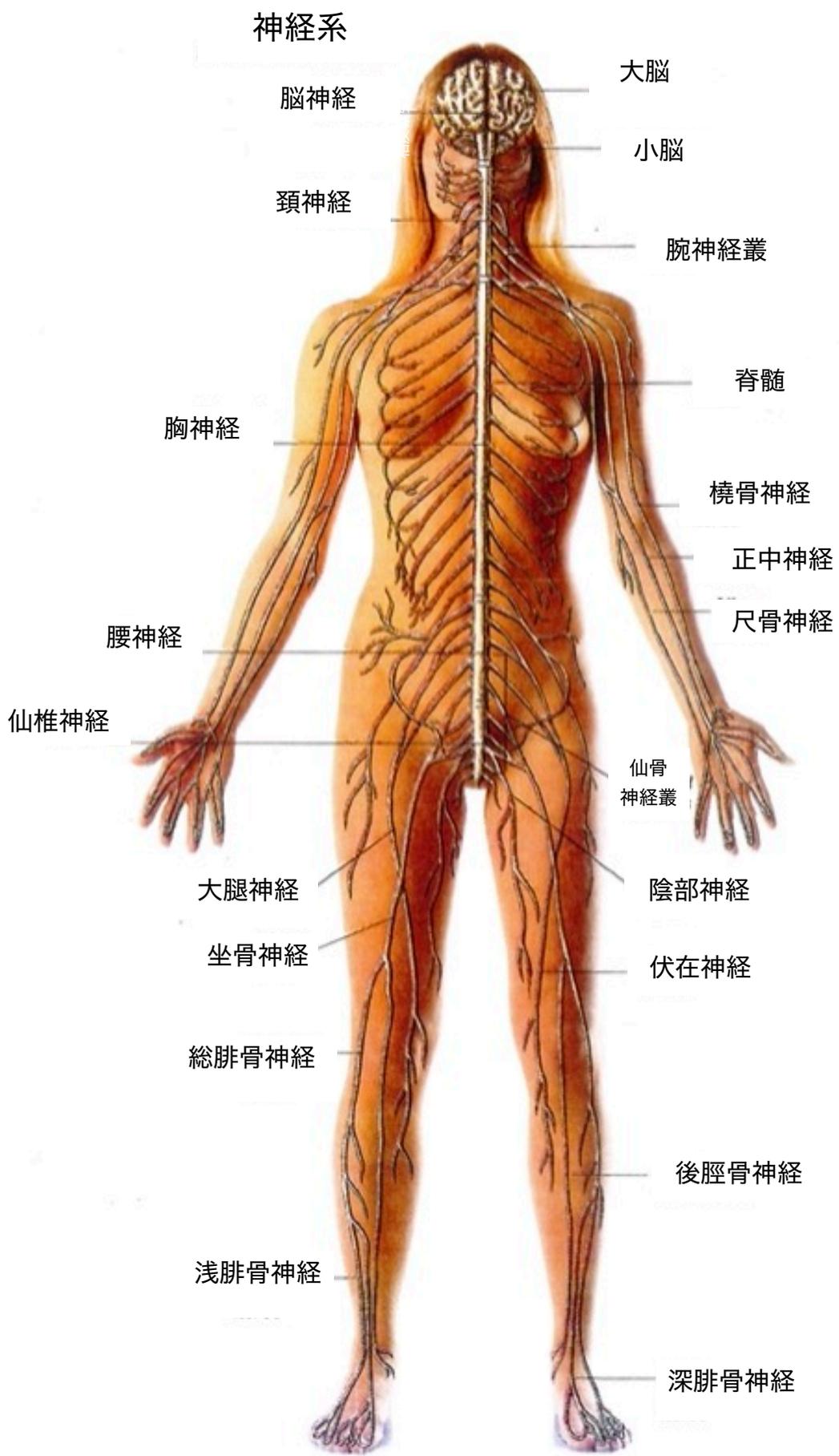
無意識への旅

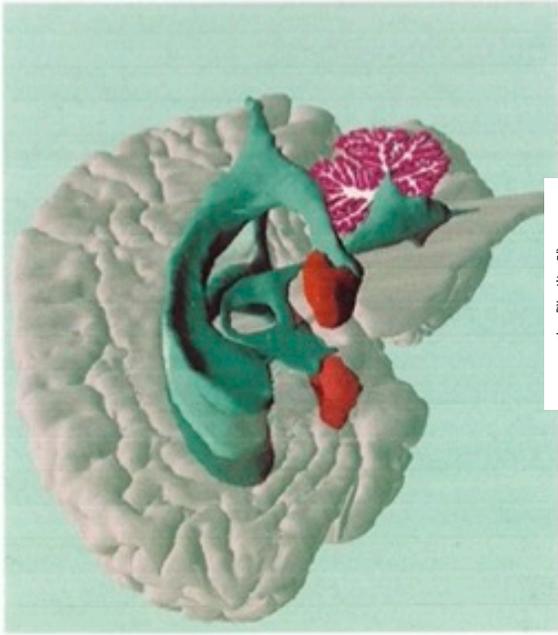
手の配置：親指は十字縫合へ

クライアントがあなたを信頼し、準備ができるまで、また脳の調整の流れを実践するまでは無意識にアクセスすることはできないだろう。意図を持って、無意識への旅への招待を提示する。

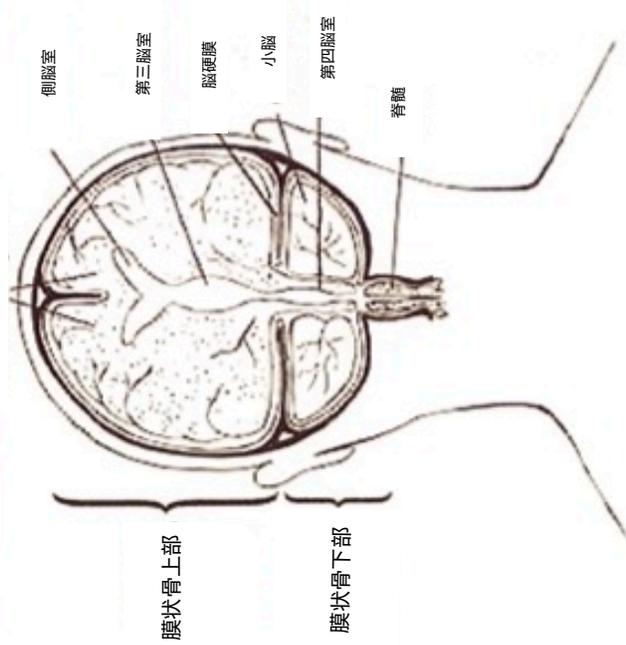
それは暗いトンネル、洞窟を降りていっているように、またエレベーターのシャフトを降りていっているように感じるだろう。これを見る際には、あなたは身体における無意識のトラウマにアクセスしているのであり、骨盤底に留まった記憶の深淵へと進んでいるのである。進み続け、底までたどりつきなさい。それは暗い。あなたはある種のイメージを見始めるだろう。それらはほとんどにおいて、不快で、その人の異なるトラウマの年齢における壊れた像であったり、死のイメージであったりする。忍耐強くあること。やがては、それが消えるまで、あなたが追うことのできる何らかの動きが生じる。忍耐強くあること。その像は、生き生きとしてきて、コアとシンクロし、解放される。クライアントはその無意識においても過去における生のトラウマをも保持し得るのである。クライアントはそこに参画していたり、いなかったりする。潜在意識が参画しているので、起きているか眠っているかは問題ではない。クライアントに、セッションの後で過去の記憶を経験することがあるかもしれないと説明したいと思うかもしれない。

トリートメントの目的は、機能的静止点を得ることにある。これはとても深い状態のリラクゼーションを表す。生命体系は今では中立的な位相において深い休養を経験しているのである。コアの支柱が経験されているのである。強調点は今では中立的、或いは休養的な静止にある。生命の波動と生命の流動体における均衡点である。





大脳半球



Det intrakraniella rummet

大脳鎌
小脳テント

